



全国大会（埼玉）のご紹介

渡邊 伸彦

今年も大図研全国大会が行われた。今年は埼玉ということで、京都の方の参加は少なく、折角参加させていただいたこともあり、簡単に雰囲気を紹介できたらと思う。

もともと全国大会という名前の表すとおり、全国のどっかに大図研会員が集って、図書館にまつわる様々なトピックについて、時に事例報告、時に知識を提供し合う討論、時に親睦など行いながら、知識を仕入れたり、視野を広げたりする場である。大図研という会の性質上、大学図書館に関わる話に限定されており、大学図書館勤めの人間などにとっては、ハズレの少ない会合である。また、先ほど会員が集うと述べたが、それと限っている訳ではないので、非会員の人や、書店の人・派遣会社の人など、割と参加者が多岐に渡っているのも面白いところである。まあ、全体の紹介もそこそこに、具体的な中身に移っていこう。

まず一日目は、ウェルカムガイダンスと研究発表、分散会・全体会に懇親会である。

ウェルカムガイダンスとは、今回初めて参加した人向けのガイダンスで、最初に10分程度で行われる。当然、2回目以降の人は参加していないので、ついうっかり初回に参加し落とすと、なんとなくウェルカム感が味わえないまま過ぎていってしまう、微妙なイベントである。大会未参加の方は、是非落とさず参加されたい。

次に研究発表である。複数の発表者で細く話をするのもあれば、数人がじっくりと話すこともあるものだが、今年は一人の方が学習目的の利用者の利用傾向について、できるだけ数値化しながら分析するというものであった。学問的な側面の強い話であったが、要素化と分析の手法が本格的で興味深いものだった。続いて、分散会と全体会である。これは、大図研自体の活動について話し合う場で、以前は全員が一同に集められた全体会のみだったが、なかなか発言もしにくかろうということで、10名程度にわかれて話し合う分散会とその後の全体会にわけられたらしい。全体会は相変わらず容易に発言できるような場ではないが、分散会は少人数ということもあり、割とざっくばらんな雰囲気、それぞれの職場の悩みや個人的に聞きたいことなど、各人の普段の職場の様子が伺える、貴重な場であった。

そして懇親会。一日目は「会」の付くものが多い。どちらかといえば、大図研としての総合的な部分が多いからだろう。翌日からは、より具体的な内容が多くなっていく。

(次頁へ)

【目次】

全国大会（埼玉）のご紹介	…	1
続京大図書館史こぼれ話 第六回	…	3

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール： dtkk@rg7.so-net.ne.jp （大学図書館問題研究会京都支部）

URL： <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

二日目の最初は課題別分科会の一回目。この分科会は文字通りテーマごとにいくつかのグループを作り、内容を深めていく。このフェイズでは「大学図書館史」「学術情報発信／機関リポジトリ」「図書館経営」「利用者サービス」「蔵書構成」「ILL」が扱われた。私が参加したのは「図書館経営」である。この分科会のトピックは業務委託で、もともと知り合いに誘われて参加することにしたところだったが、内容が内容だけに少ない参加者で泥沼的な話になるのではないかと、内心憂鬱であった。しかし、実際に会場に入ってみれば、大きめの部屋をほぼ埋めるような参加者で、そこまで注目を集めるトピックだったのかと、正直驚かされる光景であった。内容は近年図書館業務をほぼ全面的に業者へ委託した江戸川大学の、委託化に主導的な立場で取り組んだ平岡氏による、当時の取り組みと現在の状況に関する報告だった。図書館業務の委託という業界ではタブー視されてきた手法を敢えて取った氏の図書館に対する情熱と期待は、参加者にとって意外な印象を与えたかもしれない。だが、大学とそこに附設する図書館という組織との関係のあり方・考え方など、大きなサジェスションが投げかけられたことは間違いないだろう。

次はラウンドテーブルである。これはもともと、昼食時をバラバラ適当に済ませるのではなく、折角全国から集まってきているのだから、適当な話でもしながら時間を共有しようというもので、分科会と同じテーマでも軽い内容で話し合うことを目的としている。とはいえ、残念ながらラウンドテーブルとは言うものの中華料理屋の回転卓までは用意できないらしく（そもそも用意する気があるかは知らないが）、口形の机配置でお弁当をつつくといった様相に落ち着いている。しかも皆、一本気な人が多いのか、食事をしながらお話というのが難しらしく、とりあえずお弁当を食べてから話を始めるというのが常道になりつつある。つまり、ラウンドテーブルが始まってしばらくの間は口形の席にみんなが座って、脇目も振らずに黙々と弁当に向き合っているという画が繰り広げられ、これはなかなか面白い光景である。今年のテーマは「本に関するよもやま話」「ILL」「図書館システム」「電子ジャーナル」「危機管理」で、私は「本に関するよもやま話」に参加した。今回は「小説の中に出てくる図書館」ということで、最近の小説で図書館や図書館員が出てきたものを持ち寄って、話の種にしようということだった。予め配られたリストでは意外にライトノベルなどが多く、そこで描かれる図書館員や利用者の奇抜さに驚かされたが、そのリストにいくつか登場したボーイズラブという分野(?)について知らなかった参加者に対して、いかなるものかを熱く語る同じく参加者を見て、現実の奇抜さもなかなか捨てたものではないなあと感動した限りである。

午後は課題別分科会の二回目ということで、「危機管理」「出版流通」「リテラシー」「著作権」「図書館システム」のテーマで行われた。私が参加したのは「図書館システム」で、ここでは大会前より提起されていた OPAC の新しい形を探すというテーマとそれに関わる図書館システムやウェブの技術などが中心に話が進められた。基本発表者である慶応義塾大学の佐藤氏が海外の図書館システムの概況、農林水産研究情報センターの林氏が OPAC に活用可能なウェブの技術などを紹介され、その他にも飛び入りコメンテーターのような形で検索技術についての話や日本の図書館システムベンダーの話など、各分野の第一線で活動している方々の熱い討論が繰り広げられた。理想・技術・提供者、利用者・図書館・技術者、各立場が抱えている思いと、それを構造的にどう理解し実現していくかなど、実に考えさせられる中身であった。

三日目は主題別分科会。これまでの分科会とは視点を変え、「人文系」「社会系」「理工系」「生物・医学系」「教育系」と学術的な分野によるテーマで分科会を行う。私は「理工系」で、理工系雑誌を一括集中化し自動化書庫にて管理するようになった東京大学柏図書館の見学に参加した。柏図書館は学内で移管されてきた理工系の雑誌を集中保存し、e-DDS により遠隔地のキャンパスでもより簡便に閲覧可能になるようにした図書館で、大規模な自動化書庫を導入したという点でも話題となったところである。柏キャンパスが研究所が主であることと、

夏季ということもあり利用者も少なく、かなり自由に隅々まで見学させていただいた。また、参加者の五月雨式の質問にも嫌な顔一つすることなく、親切に答えてくださった担当者の方にも大いに感謝である。

その他自主企画など、いくつか開催側や参加者が用意してくれた企画もあり、大会日程としては終了であった。最終日の午後は、折角の東京近辺ということで、少々の観光と少々の名物に親しみつつ、帰途についたのである。

一参加者の体験記なので、どこまで大会の面白さや貴重さが伝わるかは定かではないが、多少なりとも感じ取って貰えれば有難い。とはいえ、私もわざわざ埼玉くんだりなど遠方まで出張するには相当覚悟が要り、毎年、どうしよっかなー、やーめよっかなーなどと思いつつ、大会一ヶ月前くらいを迎える。そうしていると知り合いが、今年はどうするの？的なことを聞いてきて、その知り合いが行くっぽい素振りを見せると、〇〇ちゃんも行くんならあたしも行くよっかなー、と決めてしまう中学生並みの付和雷同っぷりである。まあ、そんなこんなで行ってみれば、これはこれなかなか楽しいもので、得るものも多い。是非まだ大会未参加の方がこの駄文を読んでくださったなら、ひとつ物見遊山気分でも、参加していただければ幸いである。しかも、来年の開催は兵庫で行われるとのこと。京都の人も割と労なく参加できること請け合い。もちろん、あなたに誘われたなら、私もひよひよひ付いていってしまうかもしれません。あ、要らない？付いてくるな？こりゃ、大変失礼いたしました。

わたなべ のぶひこ (京都大学文学研究科図書館)

続京大図書館史こぼれ話 第六回

京大草創期、図書館を巡って起った対立事件 その3

廣庭 基介

海外留学していた法科大学の教授達は、明治32年9月までに帰国して授業開始に備えたことでしょう。ところが、帰国してきたベルリン党などの目に入ったのは、自分達が汗水垂らして彼の地で選書して京大へ送っておいた法科用原書の梱包の多くが、手付かずの状態、いわば未整理の状態で山積していた有様だったのです。そのことを、3年後の明治35年5月以前に、法科大学図書分館長に選出された岡松参太郎は、その翌年の明治36年12月に、わが国最初の冊子型洋書目録となる”*Katalog der Fremdsprachigen Bucher in der Bibliothek der Juristischen Fakultat der Kaiserlichen Universitat zu Kyoto 1903*”を発刊したのですが、その序文に次のように述べています。

本大学法科大学ニ属スル図書ノ購入ハ明治三十二年ニ始リ明治三十六年会計年度（廣庭注：明治三十五年会計年度の誤り）ノ終ニ至リテ臨時費及經常費ヲ会セ凡ソ五万参千円ヲ費シ其数凡ソ一万八千冊ニ上レリ是ヨリ先キ本大学附属図書館ハ一度此図書ノ整理ヲ行ヒ其分類ヲ為シタルコトアリシモ当時創立ノ際ニ属シ事務意ノ如クナラス昨明治三十五年ノ初ニハ整理分類ヲ終ラサルモノ書函ニ堆積シ到底一大整理ヲ為スヲ免レサルニ至レリ此ニ於テ法科大学ハ図書分館ヲ設立シテ特ニ外国書ノ保管整理ヲ為サシムルノ議ヲ決シ余ニ命シテ図書主任タラシメタリ余命ヲ承ケテ図書ノ整理ヲ為スト同時ニ其目録ヲ編纂セント欲シ乃チ昨年五月末ヲ以テ分類ニ着手シ七月末ヲ以テ之ヲ了ルヤ本大学附属図書館長嶋文次郎君ハ直ニ館員ヲ指揮シテ牌紙目録（廣庭注：カード目録）ノ調製、分類箋（廣庭注：分類ラベル）ノ貼付、書籍ノ排列及目録原稿調製ニ従事シ勵精刻九月央ニ至リ整理漸ク終リ目録原稿モ亦成ル爾来

原稿ノ校正ヲ了ル毎ニ之ヲ印刷ニ附シ本年十二月本目錄全ク成ヲ告ルニ至レリ (中略)

本目錄ノ編纂ニ当リ図書ノ分類及原稿ノ校正ハ余自ラ之ニ当レリト雖モ原稿ノ調製、印刷ノ校正其他編纂ニ係ル一切ノ事項ハ悉ク本大学附属図書館書記兼法科大学書記秋間玖磨君ノ担当セラレタル所ナリ本目錄不完全ハ則不完全ナリト雖モ我邦ニ於テ嚆矢ト云フヘキ図書目錄ノ編纂成リタルハ全ク之ヲ君ノ功ニ帰セサルヲ得ス尚嶋図書館長ハ常ニ熱心ニ法科大学図書館ノ設立整理及目錄編纂ニ尽力セラレタリ此目錄ヲ利用セラルトノ諸士希クハ功ハ之ヲ両君ニ帰シ責ハ之ヲ余ニ問ハレンコトヲ

明治三十六年十二月二十八日

京都帝国大学法科大学図書館ニ於テ誌ス

法科大学図書任法学博士 岡松参太郎

この序文を読みますと、本稿冒頭で紹介しました通り、法科大学の教授達は、明治33年には附属図書館長島水次郎、幹部司書秋間玖磨、笹岡民次郎が発起人になった関西文庫協会の行事に積極的に協力を惜しまず、次々に外国図書館に関する新知識を披露してやりましたが、明治35年になると、手の平を返したように、木下総長と島館長を攻撃し始めました。さすがに総長に対しては、「辞職せよ」とは迫りませんでした、「帝国大学附属図書館は帝国図書館に非ず」と総長の京大図書館市民公開に拒否の意志を表明した上に、島館長の更迭を要求しました。

そして、更迭要求の翌年、岡松は180度とまでは云えませんが、島館長の「励精刻苦」を認め、「嶋図書館長ハ常ニ熱心ニ法科大学図書館ノ設立整理及目錄編纂ニ尽力セラレタリ」と、その功績を称揚しているのです。

一体、当時の法科大学教官の感情の起伏はどうなっていたのでしょうか。事態の推移に対して、率直に対応したのだ、と云えるのかも知れませんが、京大法科大学学生に対する京大独自のカリキュラムを確立する上で、東大法科との差違を強力に追究することから来るストレスや焦燥感、開学前には予想できなかった「初期故障」のような不具合が当然あったと思われ、さらにベルリン党の人々が、30代半ばまでの若い年齢層であったことにも起因するのではないかと云うと失礼に当たるかも知れませんが、明らかに感情のバランスがとれていなかったように思われるのです。

(次号につづく)

ひろにわ もとすけ (元京大図書館員)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2006年度(大図研会計年度2006.07 - 2007.06)に入っておりますので、2006年度の会費の納入をお願い致します。また、2005年度以前の会費を納入いただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一

までお問い合わせください。